

論 文

厄介なる遺産——『ハード・タイムズ』と『北と南』から『素敵な仕事』へ

市 川 千恵子

Ⅰ 序

ネオ・ヴィクトリアン・フィクションの出現とヴィクトリア朝文学の旺盛な研究を支えるのは、現在の問題を過去との連続性から検証し、その根源を可視化しようとする文学的な衝動であろう。事実、ロビン・ギルモア (Robin Gilmour) による “. . . it [the Victorian past] exists in dynamic relation to the present, which it both interprets and is interpreted by. Evoking the Victorians and their world has not been an antiquarian activity but a means of getting a fresh perspective on the present.” (200) との指摘と、デイヴィッド・ロッジ (David Lodge) の『素敵な仕事』 (*Nice Work*, 1988) とは、同じ視座を有しているのである。¹ 「ヴィクトリア朝価値観への回帰」を掲げたサッチャー政権下のイギリスを描くこの小説には、ヴィクトリア朝産業小説との相関的な関係を見出すことができる。例えば、この小説の各パートのエピグラフには、ヴィクトリア朝産業小説を代表する『北と南』 (*North and South*, 1855)、『シャーリー』 (*Shirley*, 1849)、『ハード・タイムズ』 (*Hard Times*, 1854) から、それぞれ引用がなされている。また、『素敵な仕事』のヴィクター・ウィルコックス (Victor Wilcox) とロビン・ペンローズ (Robyn Penrose) との関係が、『北と南』における功利主義の男性と中流階級女性の書き換えであることは、すでにテリー・イーグルトン (Terry Eagleton) やコーラ・カプラン (Cora Kaplan) が論じている通りである。

『北と南』と『ハード・タイムズ』が女性と労働者という周縁的な存在を中心におき、19世紀中葉の産業社会における「二つの国民」の問題を提示したように、『素敵な仕事』は1980年代の社会、教育、経済を検証する新たな「イングランドの状況小説」である。本稿ではまず『ハード・タイムズ』と『北

と南』における「持たざる者」としての労働者と女性の表象を検証したうえで、ヴィクトリア朝の階級とジェンダーをめぐる問題が、『素敵な仕事』に描かれる現代英国社会にどのような痕跡をとどめ、かつ変容を遂げているのかを検証する。

II 『ハード・タイムズ』——リアリズムと想像力

ロッジは「事実と空想の対立」が『ハード・タイムズ』の主調音をなし、この対立が本作品の公と私の世界を関係づけ、さらに「広い意味での教育と社会的健全さという二つの段階を関係づけることにもなる」と指摘している (*Language of Fiction* 167)。チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) は功利主義者の悪しき支配による犠牲者として、スティーブン・ブラックプール (Stephen Blackpool) とルイーザ・バウンダービー (Louisa Bounderby) を描き出しているが、前者は産業社会の病としての労使関係の被害者であり、後者は功利主義者の父親から夫へと交換され、両者から心理的抑圧を受ける資本主義的家父長制の被害者である。ロッジが指摘する「事実と空想の対立」をめぐる問題を考えるうえで、ルイーザの存在とその立ち位置に注目することが重要に思われる。彼女がスティーブンに初めて遭遇する場面、すなわち後者が雇用主のジョサイア・バウンダービー (Josiah Bounderby) のもとに訪れる場面をみておこう。バウンダービーが組合活動に参加する労働者について尋ねると、スティーブンは彼にではなく、あたかもその妻ルイーザに答えるかのように、「違えます、奥さん」(179) という言葉を繰り返し、常にルイーザの顔に「避難所」(179) を見つけ出そうとしている。共感を懇願するような彼に対し、ルイーザが返すまなざしは「瞬間的ではあるが表情豊か」(180) と形容されるように、両者の間には感情的な親和性が存在する。スティーブンとルイーザの視線の交差には、「持てる者」による心理的支配に対する「持たざる者」の労働者階級男性と中流階級女性の爆発寸前の抑圧した感情が表出している。この三者の対面は、悪しき功利主義の哲学によって機能不全に陥っている労使関係や家庭生活、さらに公と私の両領域に影響を与える教育という問題が連動していることを暗示するのである。

スティーブンから明かされた単調で過酷な工場労働と希望のない暮らしの様子は、ルイーザを彼の住居の訪問へと駆り立てる。このとき彼女は初めて

労働者という存在を個として知ることになる。“Then, by the prejudices of his own class, and by the prejudices of the other, he is sacrificed alike? Are the two so deeply separated in this town, that there is no place whatever, for an honest workman between them?” (188) というルーザの発言通り、コークタウン (Coketown) にはスティーブンの真の意味での「避難所」は存在しない。ゆえに、彼女は町を去るスティーブンを援護するために金銭を渡す。彼女にはそれ以外に労使関係に干渉する術がないのである。シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『シャーリー』において、労使騒動に介入しようとするキャロライン・ヘルストン (Caroline Helstone) を阻止するシャーリー・キールダー (Shirley Keeldar) の戦略的な非介入と、ルーザのそれとはまったく異質なものだ。それは彼女の勇気の欠如や労働者階級への無関心を意味するのではなく、むしろ、彼女が功利主義的教育の産物であることに起因する。彼女の心はスティーブンに「避難所」を与えることを望みながらも、この段階ではその教育の呪縛から解放されていないがゆえに、コークタウンの労使問題の根源にある功利主義に抗う手段、そして社会的病を治癒する術を見つけられないのである。

ルーザとスティーブンは不幸な結婚という点でも同じ問題を共有している。ルーザは愛情のない結婚生活と別れを告げるべく、父親のトマス・グラドグラインド (Thomas Gradgrind) のもとへと帰る。一見すると、生まれ育った家庭がルーザに心の平安を与える場所であるかのようにだが、実際には父に対する娘の複雑な感情が交錯する場となるのである。事実のみに偏重した父親の教育と、自己犠牲的な決断による結婚のために、ルーザは感情を抑制し、自己を心理的な「檻」のなかに閉じ込めている。アイデンティティの危機に直面した彼女があえて立ち向かうのは、そうした自分を育んだ父親であり、記憶の場としての家庭である。まさに父の愛情が娘への抑圧や心理的暴力と化してしまう危うさを内包する家庭という空間における父との対峙は、ルーザが自己を彼の呪縛から解き放つうえで不可欠な選択となる。ディケンズはこの場面を父と娘の葛藤、そして和解の兆しのドラマへと仕立て上げる。²

“All that I know is, your philosophy and your teaching will not save me.

Now, father, you have brought me to this. Save me by some other means!”

He tightened his hold in time to prevent her sinking on the floor, but she cried out in a terrible voice, “I shall die if you hold me! Let me fall upon the ground!” And he laid her down there, and saw the pride of his heart and the triumph of his system, lying, an insensible heap, at his feet. (242)

ルイーザは初めて自らの内なる声を言語化し、正直に父親にぶつけた後で、あるがままの父親には助けを求めず、彼の内なる変化にわずかな期待をかけている。注目すべきはルイーザが床に崩れおちそうになったとき、父親の抱擁をきっぱりと断ることである。触れることの拒否は、父親と親密さを体感することの拒否であり、それは父親を完全に心理的敗北へと追いやる行為に他ならないのである。

この場面は、ロッジが指摘しているように、ルイーザが父に勧められるままにバウンダービーの求婚を承諾する場面と対をなす(173)。変化するルイーザをロッジは“far less convincing character”とみなし、彼女の言葉を“the most embarrassing lines in the novel”(173)と位置づける。こうした見方は、ようやく自分の声を取り戻したヒロインが放つ言葉の急進性によるのであろう。パトリシア・インガム(Patricia Ingham)がルイーザに「逸脱性」を見出す一方で(100)、ジュリエット・ジョン(Juliet John)はこの見方には懐疑的である(226–27)。確かにルイーザは性道徳規範の逸脱というほどの「罪」を犯してはいない。だが、思いとどまるとはいえ、一時はジェイムズ・ハートハウス(James Harthouse)の魅力に惹かれ、夫の元を離れて実家に戻り、さらに父親の哲学を否定することを考えれば、彼女はヴィクトリア朝の家庭の神話を崩壊させる存在であり、十分に急進的な側面を持っているのである。

無数の男の命を奪ってきた場所、「古い地獄坑」(the Old Hell Shaft)からようやく救出されたスティーブンは、労働者の苦しみを代弁する。彼が最後にルイーザに託す言葉は社会の平安と人々の相互の理解であるが(291)、この願いを彼女がどこまで引き継ぐのかは曖昧にされたままだ。彼女の生活が“... trying hard to know her humbler fellow-creatures and to beautify their lives of machinery and reality with those imaginative graces and delights...”(313)と描写されるように、コークタウンの変化は、周囲の人々や物事に向けられるルイー

ザのまなざしの変化、言い換えれば、個人の内なる変化に委ねられている。父親の抱擁を拒否したルイーザが、“Forgive me, pity me, help me!” (248) と救いを求める相手はシシー・ジュープ (Sissy Jupe) である。グランドグラインドとは対極的なシシーがルイーザの心の闇に光を与える (248) ことが示唆するのは、自らの再教育の途にあるルイーザに心の奥底の「檻」からの解放を与えるものとは「想像力」であるということなのである。

III 『北と南』——社会、家族、イングリッシュネス

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) は『北と南』において、社会問題の原因とその解決策を公から私の領域へ、つまり『ハード・タイムズ』と同様に外から内へと探求する。その結果、個人の内なる変化が社会の変化の兆しとして示唆されるのである。この小説の舞台となる北部工業都市ミルトン (Milton-Northern) は、暗い空、煙の味と臭いがする空気、だらしのない服装をして行き交う人々と、病める都市として表象される。街の観察を続けてきたマーガレット・ヘイル (Margaret Hale) は、功利主義の経営者ジョン・ソーントン (John Thornton) に対して、“I see men here going about in the streets who look ground down by some pinching sorrow or care—who are not only sufferers but haters.” (81) と、中立的な立場から読み取ったミルトンの社会的病の現実をつきつける。人々の表情を読み取ろうとするマーガレットのまなざしは、町で出会った労働者のニコラス・ヒギンズ (Nicholas Higgins) と、その娘で病に苦しむベッシー (Bessy) と個人的に親しくなることから、外的な場所から私的空間へ、さらには人々の内面にまで介入していくのである。

ヒロインのまなざしには労働者への共感と単純化しえない政治性が読み取れる。社会問題の治癒を家庭や心という親密なる領域から着手する彼女の戦略は、同時代の女性作家による公私の境界の曖昧化のレトリックと重なる。女性向け指南書作家のセアラ・スティックニー・エリス (Sarah Stickney Ellis) は、下層の人々に対する道徳的観念の教化を中流階級女性の私的領域における使命の延長ととらえ、女性はその感化力によって間接的に社会に貢献することが可能だと説いた。³ フェミニスト作家アナ・ジェイムソン (Anna Jameson) もまた、著作『慈善婦人会』 (*Sisters of Charity, Catholic and Protestant and the Communion of Labor*, 1857) において、次のように公共圏への女性の進出を促

す。

... she [the woman] begins by being the nurse, the teacher, the cherisher of her home, through her greater tenderness and purer moral sentiments; then she uses these qualities and sympathies on a larger scale, to cherish and purify society. But still the man and the woman must continue to share the work; there must be the communion of labour in the large human family just as there was within the narrower precincts of home. (29)

『北と南』のヒロインがその感化力を私的な関係と階級間の社会的関係に行き届けるのは、ギャスケルが使用する社会と家族の喚喩がジェイムソンのように公と私の境界を曖昧にしているからである。作者は社会と家族における家父長的なジェンダーの力学を再編成しようとし、ヒロインを優位な立場に置く。そうすることによって、下層の人々の家庭、そして心までもが、道徳的に優越したヒロインの観察と干渉の領域に含まれるのである。

功利主義のソートンは、工場経営者と労働者の関係は労働時間にとどまり、一切の私的感情を排除すべきだと考え、労働者を修辭的に「ハンズ」と呼ぶ(121)。マーガレットはソートンに社会的責任を認識させようとして、経営者と労働者の対立に干渉を始める。彼の工場で暴動が起きたとき、マーガレットはソートンをかばうために、労働者の前に立ちはだかるという大胆な行動に出る。労使問題への介入を象徴するヒロインの行為は、彼女が無意識のうちに抱くソートンへの欲望を本人だけでなく、大勢の男たちにまで示唆してしまう外傷的な経験でもある。労働者が投げた石が額に命中し、血を流して気を失うというヒロインの性的脆弱さが現前化する場面の後、ソートンは気絶したマーガレットを腕に抱き、“my Margaret” (180) と呼びかける。だが、彼女に対して次第に精神的に隷従していくのは、むしろソートンのほうだ。マーガレットの正義感や勇気はその道徳的優越性としてソートンの心に刻まれ、彼は彼女が与える良き経営者像へと自己を変容させていくのである。

ミルトンの労働者の代表として描かれる労働組合活動に熱心なヒギンズもまたマーガレットによって変容していく人物である。ヒギンズは娘の死、失

業、労働組合への不信感について助言を求めに、元牧師のヘイル氏を訪ねる。ヘイル家に入る前に、自分の身を清めるの必要性を感じ取ったヒギンズは、石鹸で顔と髪を洗い、靴を磨く。このときすでに、彼は中流階級の価値観という網の目に絡め取られているのだ。ヘイル氏と会話をするヒギンズの清潔な風貌は、語りのなかで礼儀正しさと善良さに重ねられる(225)。さらにヘイル氏ではなくマーガレットがヒギンズを敬虔なキリスト教徒へと導くことを示す場面がある。すなわち妻を迫るようにして急逝したヘイル氏の聖書を、マーガレットがヒギンズへ手渡す場面である(371)。道徳的に優越し、敬虔な中流階級女性が、無信仰の労働者をキリスト教徒へと変えるこの行為は、当時の福音主義に根ざした慈善活動のなかで主要な目的の一つであった。⁴ マーガレットとヒギンズの関係は、英国の内なる他者としての労働者階級が清潔さと信仰を授けられて、他国を支配する「優越した」国民像を内面化していく様相と、さらにこうした国民像形成における女性の積極的な関与の様相を可視化させるのである。

階級間の調停役を引き受けるマーガレットは、常に道徳的に優越した中流階級女性としての権威を身にまとい、人々の内面に介入し、社会における秩序とヒエラルキーの維持に貢献する。同時にこうしたヒロインの行為は、ミルトンにおける自らの位置の指定にも関係している。ソーントンは家父長的で寛大な雇用主へ、ヒギンズは勤勉で従順な労働者へ、つまり二人はマーガレットがそれぞれに与えた理想像を内面化する。ミルトンを代表する二人が歩み寄ることによって、工業都市の病理であった労使関係に改善の兆しが見え始める。ソーントンが家父長的な経営者となることが意味するのは、ミルトンが家父長的な都市へと変容していくということに他ならない。さらマーガレットは突然手に入れた遺産によって、ソーントンを経済的窮地から救い、彼の求婚を承諾する。ドリス・ウィリアムズ・エリオット(Dorice Williams Elliot)は、ギヤスケルがヒロインに公の場における自由で自律した役割を与えながらも、結婚という結末によって、男性による女性の支配の場としての家庭における私的な取り決めを不問に付したと指摘する(25)。だが、ミルトンの救世主としてのヒロインは、父親としての経営者と子供としての労働者という社会的構図の上に位置づけられている。「大きな家族」へと変貌を遂げるミルトンにおいて、「ソーントン夫人」という記号がもつ私的、かつ社

会的影響力は、社会秩序を守護しようとするマーガレットの立場を正当化するのである。

ミルトンの社会的病は治癒されたが、未解決の問題が一つ残されている。それはストライキ中の労働者の代わりとして、ソートンが呼び寄せたアイルランド人の存在である(173)。イングランドの重工業地域におけるアイルランドからの移民は、コモンウェルスからの非白人の流入が始まるまで、不可欠な労働力の提供者であり、最下層の非熟練労働者であった。だが、イングランドの工場労働者の賃金の低下や失業の恐れを招く要因にもなった(Tracy 80)。また、19世紀中葉に発行された工業都市の公衆衛生や犯罪に関する調査書は、アイルランド人を伝染病や社会的問題の種と結び付け、イングランドの「健全な」社会に対する脅威として表象する傾向にあった(Poovey 63-72; Gilbert 72-74)。マーガレットが“poor strangers”(177)と呼ぶ絶対的な他者である彼らは、ミルトンの町の秩序、すなわち「大きな家族」としての人々の一体感、言い換えればイングリシュネスの構築に脅威をもたらす存在であるがゆえに、大団円の結末からは排除されてしまうのである。

IV 『素敵な仕事』——想像力の可能性

『素敵な仕事』の第三部のエピグラフに引用される『ハード・タイムズ』のスリアリー(Sleary)の言葉“People must be amuthed.”は、ロビンの産業小説講義のなかでも言及されている。ヨークタウンの単調で悲惨な暮らしの対極にあるのが、想像力にあふれた集団のサーカスであり、グランドグラインドの人生で贖罪の力を発揮するのがシシーの存在だというロビンの議論は(48)、先述したロッジの『ハード・タイムズ』論における「事実と空想の対立」という読み方に依拠している。この対立によって可視化される社会と私的空間、さらに個人の心と教育の連動性は、『素敵な仕事』においては政府が1986年を「産業年」(“Industry Year”)と定め、各大学の研究者が実業界の現実を学ぶ「シャドウ計画」(“Shadow Scheme”)を通して探求されるのである。ロビンは産業小説研究者という安易な理由から、ヴィックのプリングル社(J. Pringle & Sons)への派遣者として選出される(56)。この企画によって彼女はヴィックの「シャドウ」となり、同時に自分自身の「シャドウ」にもなるのだ。いわば「分身」という立場がロビンに大学というアカデミックで創造的な世界と、プリ

ングル社のリアリズムが支配する世界という異なる領域の自由な横断を可能にし、批評理論によって把握していた社会と現実の乖離を学び取らせることになるからである。

『素敵な仕事』の舞台は、イングランド中部に位置するラムッジ(Rummidge)という名の地方都市である。ヴィックの通勤の様子描写のなかで、その近辺の別称が“Dark Country”である背景が説明される。それは19世紀に石炭と鉄の街として英国の繁栄を支えてきた重工業都市の歴史的記憶からだけでなく、戦後に多く流入した移民の肌の色にも由来しているのだ(16)。1962年の英連邦移民法施行にいたるまで、旧植民地と英連邦の住民は「イギリス臣民」として自由に「母なる国」イギリスへ入国し、居住する権利を有していた。国内の失業率の高まりから移民の増加が批判の対象となり、さらに1965年、68年と段階的に移民規制措置が取られた。しかし、彼らの多くは低賃金の非熟練労働の担い手であり、労働市場の需要を満たす存在であった(Clarke 320-26)。19世紀中葉にギヤスケルがその存在を提示しながらも、最後に不問にせざるをえなかった最下層の非熟練労働者という移民の問題が、『素敵な仕事』の1986年の英国ではいかなる変容を遂げているのか、女性と労働者の関係に焦点を当てながら考察したい。

冒頭でヴィックが手にする朝刊の経済欄が報じているのは、高金利政策による失業率の急増をめぐる蔵相の動きである。失業の憂き目にあうのは、もはや労働者階級の人々だけではない。臨時講師という身分のロビンもまた、常に失業の不安にさらされている。彼女はケンブリッジ大学にて博士号を取得したものの、大学教員の正規の雇用機会に恵まれず、ラムッジ大学での任期も直に切れようとしている。これは教育現場に利潤原理を導入し、予算を大幅に削減したサッチャー政権の大学政策が主たる原因である(Martin 63)。地元の高等技術専門学校を卒業後、工場の見習い工からプリングル社の取締役社長までのぼりつめた立身出世を体現するヴィックが“academic Vatican”と呼ぶ(14)、特権的に超越しているかのような「象牙の塔」においても、今やストライキが実施され、ロビンが参加する姿はヴィックに目撃されてしまう(73)。彼女がジャケットの襟につける複数のバッジにはそれぞれに“Support for the Miners, Crusade for Jobs, Legalise Pot, A Woman’s Right To Choose”(28)と政治的メッセージが書かれている。『ハード・タイムズ』と『北と南』が修

辞的に結び付けた労働者と女性の関係を、ロビンはファッションという日常のかつ実践的な形で同等のものとして結びつける。したがって、彼女はもはや労働者のストライキの傍観者や干渉者ではなく、実際にピケを持って参加する側に位置するのである。

ロビンがプリングル社に車で向かう際の町の描写をみておこう。商店、事務所、持ち帰り用の料理店などが立ち並ぶ通りを抜けると、彼女は自分が住む郊外に比べ、緑や公園が少ないことに驚き始める(65)。19世紀以降、富裕層は都市の中心から郊外へと住居を移し、都市の中心部、つまりインナー・シティは低所得者層と旧植民地からの移民が住む場所となった。次第にロビンの目に入るのは、サリーを着た女性、アジア系の名の商店の看板、次にカリブ系の人々といったように、現代英国の多文化社会の一端である。1980年代には移民の多く住む都市で暴動が発生した。例えば、アフロ・カリブ系住民の多い地域として知られるロンドンのブリクストン地区での1981年の暴動の背景には、非白人人口の多くが居住するインナー・シティ部における経済的衰退や警察などの公的権力に対する根深い不信感があった(Sivanandan 151-52)。サッチャリズム批判の急先鋒だったステュアート・ホール(Stuart Hall)が1992年のインタビューにおいて、“Having been prepared by the colonial education, I knew England from the inside. But I’m not and never will be ‘English’. I know both places intimately, but I am not wholly of either place.”(Chen 490)と発言するように、一つの家族として共同体を描くことが可能だった時代とは異なり、現代社会は分割され、多元化されている。むしろイングリッシュネスを構成するのは、そうした内的な差異であろう。

ロビンは工業都市に漂う絶望感のなかに浮遊する異質な空間を目の当たりし、物悲しさを感じることを禁じえない。それはルイーザやマーガレットが労働者階級の生活の場を訪問した際に抱いた衝撃とさほど変わるものではないだろう。ロビンが講義の中で展開する明快で、いささか紋切り型のフェミニズム批評によると、産業資本主義は基本的に“phallogentric”であり、19世紀の中流階級出身の女性作家が産業について書くことは、潜在意識のレベルにおいて、自らの喪失感、つまり去勢コンプレックスを癒す行為である(49)。また、『北と南』のヒロインが工場の生活と物の製造過程に対して抱く興味も、彼女のセクシュアリティの表れだと解釈される(49-50)。ロビン自身がヴィッ

クのご案内によって工場内部を見学し、不潔さや無秩序に衝撃を受けた後、「シャドー」としてコミットする動機づけとなる要因は、工場内の白人至上主義と人種差別への怒りである。鋳物工場の劣悪な環境のなかで、延々と同じ作業を繰り返す褐色の労働者の姿が、フェミニストで左派のロビンの目には次のように映るのだ。

That he was black seemed the final indignity: her heart swelled with the recognition of the spectacle's powerful symbolism. He was the noble savage, the Negro in chains, *the archetype of exploited humanity, quintessential victim of the capitalist-imperialist-industrial system*. It was as much as she could do to restrain herself from rushing forward to grasp his hand in a gesture of sympathy and solidarity. (90, 強調は引用者)

彼女が黒人労働者を「資本主義的帝国主義的産業組織の典型的犠牲者」と記号的に読み取った人種差別問題は、戦後の移民流入の結果ではなく、過去から続いてきたもの、言い換えれば、常に英国社会が抱えながら、目を背けてきた内在的な問題である。男性に「共感と連帯感」を示そうとする彼女のしぐさが幾分パフォーマンスのように感じられるのは、工場内の現実を記号論で読み取る、いかにも世間知らずな文学研究者としてのヒロインの反応を作者が揶揄しているからであろう。また、結末におけるヴィクトリア朝小説の因習的な遺産相続の踏襲にも、机上の理論と現実との乖離に対する作者の揶揄が見出せる。不安定な雇用形態にあるヒロインが黒人労働者に「連帯感」を抱きながらも、彼女は帝国主義の「犠牲者」という位置には属していない。オーストラリアで財をなした叔父の遺産、つまり過去の帝国主義的野心が築いた富が彼女の経済的窮地を救うという結末にも、ヒロインの政治的思考と現実の齟齬が示されているのである。

しかし、工場内の絶対的な支配関係に対して、ロビンが敏感にならざるをえないのは、臨時講師という立場ゆえに「シャドー」の役割を承諾せざるをえなかったからだ。それゆえに、雇用上の人種差別問題の発覚を機に、彼女は与えられた役割を主体的に演じていくのである。工場という男性領域に対するロビンの侵犯行為には、彼女の潜在的な欠如感や欲望の充足願望が読み

取れる。人種差別に無頓着なヴィックが、インド系のダニー・ラム (Danny Ram) という労働者に対して間違いを犯すように圧力をかけ、不当な解雇を企む計画を耳にしたロビンは、『北と南』のマーガレットがソートンにしたように、ヴィックに道徳的な経営を説き (98)、ラム本人にもその計画を知らせ、警戒するように忠告する (100)。その正体を問うラムに対し「シャドー」と答えるとき、彼女はこの役割を楽しんでいる。同時に匿名性を保つ彼女の行為は、他者の自律と自由への配慮と、特権的な干渉の回避であろう。一方でヴィックのほうは、その心をロビンに占有されていく。ドイツでの商談においてロビンの機知が彼を救い、二人はその成功を祝福後、高揚感からベッドをともにする。ロビンは同業の恋人とは禁欲的快樂主義とも言うべき関係が続けているのだが、その夜はヴィックに対し自らを解放する。欲望の客体ではなく主体として、彼女は“sense of triumph” (207) を感じ取っているからだ。この二人きりの出張の前から、ヴィックはロビンに対し男性主体の典型的な性的ファンタジーを抱いていた。しかし、ロビンは受動性と併存する性的欲望の対象としての属性を持ち合わせた女性ではない。むしろ彼女の欲望に消費されるのは、ヴィックのほうである。また、この場面ではそれぞれの出身階級と思想を示唆する暗号がコミカルに配置され、常に優位に立つのはロビンであり、女性に対するヴィックの幻想は完全に否定される。彼がその後には味わう敗北感と、ロビンが嫌悪していた工場内に何枚も張られたヌード女性のピンナップ、すなわち、不特定多数の男性による女性ジェンダーの消費と欲望の再生産を低俗な形態で示すものを一掃する行為に彼を駆り立てる (245) こととは、無関係ではないのである。

ロビンが講義で示した通り、産業資本主義の問題に対して 19 世紀の小説家が提示する解決策のコンベンションは、遺産、結婚、移住、そして死だが (52)、本テキストが踏襲するのは遺産のみである。『北と南』と同様に、『素敵な仕事』においても、偶発性や状況の変化に応じて「持てる者」と「持たざる者」の位置も入れ替わるのであるが、会社の方針転換により社長の座を自ら捨てたヴィックの起業に対し、ロビンは突然舞い込んだ遺産から資金を投じる。だが、ここで留意すべきは、その投資が彼とその家族の救済という個人的なものであり、社会や共同体といった概念とは無関係であることだ。これはヴィクトリア朝産業小説の結末に対するロッジの一つの解答だと解釈

できるのである。

V 結び

『ハード・タイムズ』と『北と南』における社会問題批判の視点は、近代資本主義社会と、私的領域にある生と性の政治との不即不離の関係を浮上させる。ヴィクトリア朝産業小説の想像的な借用によって、ロッジは近代から現代にかけての英国の歴史と文化的経験への関心を言語化する。『素敵な仕事』が舞台とする工場と大学は、英国国民としての「全体性」と、内的な差異を有する個人としての「部分性」を併せ持つ人々が暮らす多文化社会を縮小した空間である。モザイクのように複雑な社会の現実を学び始めたロビンが南に住む両親に対して、“You don’t know what the real world is like down here” (219)と放つ言葉には、伝統的なイングリッシュネスを永遠に召喚することで充足し続けるような閉鎖的な場所に執着する偏狭な視野と思考への批判がこめられているのである。

19世紀中葉の産業小説が提示した階級、ジェンダーをめぐる問題は、『素敵な仕事』が描く1980年代の英国においては、さらに人種という要素を加えて複雑な様相を呈し、その緊張関係は安易な分節化を躊躇させる。女性のジェンダー・ロールへと目を転じると、ロビンのなかに古さと新しさが共存していることが明確に読み取れるであろう。ローズマリー・ボーデンハイマー (Rosemarie Bodenheimer) は、ロビンを工場という場所へ道徳的想像力をもたらす生真面目なヴィクトリア朝ヒロインの“the natural daughter” (171)として見る。ロビンは第二波フェミニズムの洗礼を受け、解放された性を享受する20世紀の女性であるが、彼女もまた他者を「ケアする」というジェンダー・システムによって構築された伝統的な中流階級女性としての役割を無意識のうちに継承しているのである。

最後に窓からキャンパスを眺めるロビンの視線の先にあるのは、芝生の上いきりとられた1980年代英国の「二つの国民」の有様である。若い白人学生と黒人のガーデナーが物理的には接近しながら、本能的に接触を避けている様子は、“It seems a very British way of handling differences of class and race.” (277)と語られる。ここに併置されるのがロビンの抱く秘かな夢、つまり自分の大学がプリングル社の労働者に占領されることである。このユートピア的

なヴィジョンもまた、彼女をヴィクトリア朝産業小説のヒロインの「娘」と位置づけることを可能にする要素である。そして、彼女のユートピア的なヴィジョンは、サッチャリズム下の「ヴィクトリア朝価値観への回帰」という時代錯誤と、ナショナリスティックな政治的・文化的言説に抗う「想像力」なのだと言えるだろう。

注

本稿は釧路公立大学での公開講座「ネオ・ヴィクトリアン小説からみる英国事情」(2007年10月18日、11月8日)と、ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会における「厄介なる遺産—『ハード・タイムズ』と『北と南』から『素敵な仕事』へ」(2009年6月20日、於中京大学)における口頭発表に加筆・修正を施したものである。

1. ロッジは『小説の技巧』(*The Art of Fiction*, 1992)のなかの歴史小説を扱った章において、ネオ・ヴィクトリアン・フィクションの先駆けとなったジョン・ファウルズ(John Fowles)の『フランス軍中尉の女』(*The French Lieutenant's Woman*, 1962)の語りにおける綿密な過去の再創造と意図的な時空の隔たりの暴露を論じながら、20世紀末の小説家が19世紀の社会や人々を描き出すことを可能にするのは、過去を現代の視点から捉えなおす作業だと指摘している(132)。
2. サリー・レッジャー(Sally Ledger)は、『ハード・タイムズ』を19世紀の大衆的メロドラマに負う小説とみながらも、ルイーザが最後に家庭的な幸福を手に入れられないことを理由に、“Louisa never quite fits the melodramatic script”(213-14)と論じる。
3. エリスの指南書については、拙稿“The Rise of Angels with Wings of Clay: The Cult of Domesticity and Sarah Stickney Ellis’ Conduct Books”を参照。
4. 中流階級女性による下層階級家庭訪問や女性衛生協会の活動とその目的については、拙稿「ヒロインのまなざしに潜む政治性—エリザベス・ギヤスケルの『北と南』」を参照。

引用文献

Bodenheimer, Rosemary. “The Nice Work of Victorian Novels in Thatcher’s Britain.” *Victorian Turns, Neo Victorian Returns: Essays on Fiction and Culture*. Ed. Penny Gay, Judith Johnston, and Catherine Waters. New Castle upon Tyne: Cambridge

- Scholars, 2008. 171–81.
- Brontë, Charlotte. *Shirley*. 1849. Oxford: Oxford UP, 1981.
- Chen, Kuan-Hsing. “The Formation of a Diasporic Intellectual: An Interview with Stuart Hall.” *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*. Ed. David Morley and Kuan-Hsing Chen. London: Routledge, 1996. 484–503.
- Clarke, Peter. *Hope and Glory: Britain 1900–2000*. London: Penguin, 2004.
- Dickens, Charles. *Hard Times*. 1854. London: Penguin, 1985.
- Eagleton, Terry. “The Silences of David Lodge.” *New Left Review* 172 (1988): 93–102.
- Elliot, Dorice Williams. “The Female Visitor and the Marriage of Classes in Gaskell’s *North and South*.” *Nineteenth-Century Literature* 49 (1994): 21–49.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*. 1855. Oxford: Oxford UP, 1982.
- Gilbert, Pamela K. *Cholera and Nation: Doctoring the Social Body in Victorian England*. New York: State University of New York P, 2008.
- Gilmour, Robin. “Using the Victorians: the Victorian Age in Contemporary Fiction.” *Rereading Victorian Fiction*. Ed. Alice Jenkins and Juliet John. Basingstoke: Palgrave, 2000. 189–200.
- Ichikawa, Chieko. “The Rise of Angels with Wings of Clay: The Cult of Domesticity and Sarah Stickney Ellis’ Conduct Books.” *Studies in English Literature* 47 (2006): 87–103.
- Ingham, Patricia. *Dickens, Women and Language*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1992.
- Jameson, Anna. *Sisters of Charity, Catholic and Protestant and the Communion of Labor*. 1857. Westport, Conn.: Hyperion, 1976.
- John, Juliet. *Dickens’s Villains: Melodrama, Character, Popular Culture*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Kaplan, Cora. *Victoriana: Histories, Fictions, Criticism*. New York: Columbia UP, 2007.
- Ledger, Sally. *Dickens and the Popular Radical Imagination*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. London: Penguin, 1992.
- . *Language of Fiction*. 1966. London: Routledge, 2002.
- . *Nice Work*. London: Penguin, 1988.
- Martin, Bruce K. *David Lodge*. New York: Twayne, 1999.
- Poovey, Mary. *Making A Social Body: British Cultural Formation, 1830–1864*. Chicago: UP of Chicago, 1995.
- Sivanandan, A. “Britain’s Gulags.” 1990. *Writing Black Britain, 1948–1998: An Interdisciplinary Anthology*. Ed. James Procter. Manchester: Manchester UP, 2000. 149–53.
- Tracy, Thomas. *Irishness and Womanhood in Nineteenth-Century British Writing*. Farnham: Ashgate, 2009.
- 市川千恵子, 「ヒロインのまなざしに潜む政治性——エリザベス・ギヤスケルの『北と南』」, 柳五郎編『ザルツブルグの小枝』, 大阪教育図書, 2007, 571–82.